

乙訓ひまわり園での取り組み
～トリムタブカレッジ事業紹介
(龍谷大学内カフェ樹林での実践)～

乙訓ひまわり園 地域連携室
室長 井上 大

カフェ樹林

*

(龍谷大学者HPから)

* https://www.ryugaku.ac.jp/web/information06/jurn_open060412.html

* 障がいがあるカフェ「カフェ樹林」のオープニング式典が開催されました

* 2006年4月12日 12時30分から、深草学舎において、知的障がい者、精神障がい者が働くカフェ「カフェ樹林(じゅりん)」のオープニング式典が開催され、式典終了後にカフェが開店いたしました。

* 式典には、神子上恵群学長、カフェ樹林の運営者である社会福祉法人向隣会小野治理理事長、学生を代表して、学友会中央執行委員会の上野山晶子委員長等、多数の方が列席されました。

* 冒頭の挨拶において、神子上学長は「障がいのある人や様々な人々が、互いに補い合い、生かし合い、支え合って暮らしていく社会を、つまり共生(ともいき)を目指そうとする本学の思いが、この小さなカフェとなって現れました」とカフェ開設の目的を述べられました。引き続き、カフェのオープンを記念して、樹林の正面入口前でテープカットがおこなわれました。

* テープカット終了後、店内に入った神子上学長、小野理事長は、最初の来店者となって、注文(ファーストオーダー)をおこないました。

* 式典後は開店を待ちわびていた学生達で賑わい、「カフェ樹林」特製のコーヒーや焼ききたパンを味わいながら、お昼のひとときを過ごしていました。

カフェ樹林作業風景



営業開始当初は、学生もどんなお店なのかということに興味もあり、連日盛況で忙しい日々が続く。合わせて、龍谷短大生の実習場所としての機能もあり、スタッフ、メンバーも右往左往しながら、営業をしていた時代。ただ、その時期も少しずつ、落ち着き初め、実習生の受け入れも減っていき、お客も減少傾向になりつつあった。

樹林が、就労系の働く場所というよりも利用者の居場所のようになり始めて時期もあり、何のためにという目的が見えなくなってきた・・・。

〈利用者にとっての仕事(働くということ)〉

カフェでの接客業務や、レジでの金銭管理なども、あくまでも、「働く」ということの模擬体験であり、この作業で、金銭的に自立していける、いくの? 作業を通して社会経験を積むことは大切ではあるが、では、その先に見通しはあるのか?

毎日、同じことを繰り返すということが彼らにとって安心・安定にはなるが、それが福祉サービスとして提供することなの?等々

要は、作業は手段であり、一人ひとり、目的も目標もそれぞれ違うということ。

〈乙訓ひまわり園ワークセンターでの課題〉

現在でも、ワークセンターは様々な障がいのある利用者が、「働く」ことを目的に、日々それぞれの課題、できる作業を通して社会参加に励んでいる。

ただ、障がいの程度の違いもあり、センターとしてのバランス、平均化するため、一般就労や、より高い工賃を求める動きを作りにくい。本来、利用者の支援は、平均化するべきものではないという視点がきっかけ。

〈支援学校卒業後〉

そもそも、健常者は高校卒業後、大学等で学ぶ機会があるが、支援学校卒業者は、卒業後、福祉サービスを利用して働くか、一般就労するという選択肢がほとんどで、学ぶという機会が少ない。

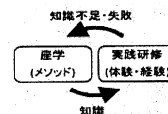
支援校高等部3年間で、社会性、コミュニケーション能力等々、身につけていないまま卒業を迎える利用者も多い。結果、仕事に就いた時、上司からテクニカルなことは学ぶが、仕事へのモチベーション、実生活での課題解決などそういったフォローを受ける機会も非常に少ない。

〈トリムタブカレッジの実践〉

～学ぶということ～

「座学(メソッド)」とは「道徳」のようなもので、各種テーマを通じて『知識』を得て、それを以って「実践研修」に臨み、それを『知恵』へと変換させる。

また『失敗』も1つの経験として、そこから「原因」と「対策(改善策)」を利用者なりに考えることが「成長への近道」であると捉えて、あえて失敗しそうであっても、必要以上に職員から声掛けや指導をしないようにしています。



龍谷大学生達が考えた企画に利用者が単に参加するだけでなく、企画段階から参画し、学生と一緒に考えて意見を出し合ってきた。

新商品やイベントなどを考案・実施することで、より多くのお客様と触れ合う機会をもち、自主性や主体性などを育てている。

また、大学外にも積極的に出ていき、例えば、京都市内の寺社仏閣や各種施設などを訪問したりすることで、「座学(メソッド)」で学んだことを、ただ『知識』とするのではなく、実際の行動・体験を通して、自らの学びと成長に結びつけられるようになり、人間的に成長することを目指している。

「トリムタブ」とは、「大型船舶の舵の先端にある“小さなパーツ”」のことで、最初にこの部分が動くことで船の進路を変えることが可能になることから、「たとえ小さな存在であっても、自らが起点となり、社会に貢献する人材を育成していきたい」という思いが込められており、大学という空間を最大限に活用して、障がい者と学生が共に学び、さまざまな体験・経験を共有することが“大きな特色”

「支援者と利用者」という関係性では、どうしても指導者と生徒のような関係に陥りがちになり、障がい者の可能性を狭めてしまっているのではと感じることがある。

比較的年齢に近い学生と一緒に活動することで、利用者にとっては「学生のようにになりたい」という明確な目標が得られるとともに、学生にとっても利用者との交流を通して、「自己を見つめなおす機会にもなる」。

まさに『障がい者と学生が相互に刺激を受け合い、切磋琢磨し合うことができる場所』となっている。

この事業を通して伝えたいこと

障がいがあるとなかろうと、チャンスは人それぞれ平等に存在していると思います。そのチャンスの芽を摘むのも、伸ばすのも支援者に大きく左右されているのが現状です。

支援者一人ひとりが、今、向き合っている利用者にとってほしいのか、どういった生活をしてもらいたいのかということを考え、実践することがとても大切なことだと思います。日々、支援をしながら、支援者自身がその人の将来をどう思い描くのか、これを考えることこそが、支援者の本来の仕事だと思います。そういった事に想いを馳せられるように努めてほしいと思っています。

* 〈最後に・・・〉

向陵会で取り組んでいる就労系事業の動画紹介をさせていただきます。

<https://youtu.be/ztXKmdhla0E>

ご清聴ありがとうございました。